［同志社女子大学］

「SEITOフォトコン」の魅力

同志社女子大学 学芸学部・文学研究科事務室（メディア創造学科）

はじめに

同志社女子大学写真コンテスト「SEITOフォトコン」は、高校生が日々の生活の中での感動・想い・生活感覚などを若い感性で作品にすることで、物事を見つめるセンスを磨き、コミュニケーション力や表現力を高める機会となるよう、2008年から実施している。今年度で14回目の開催となり、入選作品はWebサイトに掲載する他、本学ラーニング・コモンズのオープンギャラリーや連携協定締結の病院等で展示をおこなっている。

1　コンテストの概要

本コンテストは、応募資格を「高校生（女子に限る）」としており、世界的にも珍しい女子高校生にターゲットを絞った写真コンテストである。女子高校生に自由で独創的な表現をしてもらうことを狙いとして、テーマを敢えて設けないことで、枠にとらわれないユニークな作品が多くみられるのが特徴である。これまでの入賞・入選作品を振り返ってみると、現代の日本の女子高校生が、人とどのように触れあい、世界をどのようにとらえているかが、ありありと見えてくるような気がする。作品の多くは高校や自宅、その周辺で撮られており、被写体は身近な友人や家族などで、特別な人はほとんど見当たらない。しかし、そうした空間や人間関係の狭さとは裏腹に、実に多様な表現があふれている。そして、それらの写真は常に「今」を映している。近年は、新型コロナウイルス感染拡大という状況の中での、不安・憂鬱・儚さ・抑圧・逃避など、ネガティブな感情を感じさせる表現が数多く見受けられた。一方で、こうした状況を打ち破ろうとするような、喜び・楽しみ・美しさ・希望・解放などのポジティブな感情を表現する作品にも数多く出合うことができた。2021年度の最優秀賞に選ばれた作品のタイトルは「何よりも強い愛」であった。コロナ対策として透明ガラス板とマスクで厳重なソー

シャルディスタンスを強いられているなかでも、固い絆や愛する心があれば距離や障壁は関係ないということを感じられる温かい作品である。作品を通じて、彼女たちの考えや感情を知ることができるため、毎年新しい発見や気づきがある大変有意義なコンテストとなっている。

2　参加状況

記念すべき第1回の応募作品数は280点だった。その後は年々増え続け、2017年度で過去最多の1043点もの応募があった。2020年度744点、2021年度754点とコロナ禍による外出自粛の影響により、写真部などが活動できない状況の中でも多くの応募があり、本コンテストが高校や高校生たちにどれほど大切にされているかを実感した。これまでの応募総数は8850点にも及び、応募があった高校は北海道から沖縄まで国内47都道府県だけに留まらず、近年は海外からも応募があるなど今後の発展が見込まれる。

おわりに

今後も本コンテストの作品の表現にさらなる幅や奥行きが加わることで、一層面白いコンテストになると感じている。多くの人材を発掘し、育て、そのことによって社会を変えていく。この大きな目標に向けて、できる限り長く続けることが大切である。本コンテストの魅力や可能性をさらに発展させるよう、時代に見合った新しい試みも模索していきたい。これからの「SEITOフォトコン」にも期待してもらいたい。

(https://www.dwc.doshisha.ac.jp/seito_photocon/)

2021年度最優秀賞「何よりも強い愛」

［武蔵野大学］

数学を駆使して社会課題の解決を目指す
―数理工学コンテストのこれまでと展望―

西川 哲夫　武蔵野大学工学部数理工学科教授

はじめに

数理工学コンテストの立ち上げは、武蔵野大学工学部数理工学科設立の1年前の2014年に遡る。数理工学科の方針は、「自然現象や社会現象をモデル化してシステム設計に活用できる能力や、ビッグデータから統計学を用いて問題の本質を見抜き、社会課題の解決を目指すデータサイエンスの能力の育成をバランスよく行うこと」である。コンテストの目的は、この方針の認知度を上げること、及び中学生・高校生に、身近な興味深い事象を数理の力で解き明かし発表する機会を設けることで、数理・データサイエンス教育の普及に貢献することである。

中学生・高校生向けのコンテストとしては、数理モデルの応用「高校生によるMIMS現象数理学研究発表会」（2011年～）や、統計学を活用したビジネスコンテスト「データビジネス創造コンテスト」（2014年～）などが立ち上がってきていたが、数理モデルと統計の両方に焦点を当てたコンテストはなかった。そこで、コンテストのテーマとして、数理工学科の方針である「数理モデル」と「統計」の2つのテーマを設定した。現実課題の解決には、「数理モデル」と「統計」の両方が必要な場合も多く、このテーマ設定が、数理工学コンテストのユニークな点である。

1　数理工学コンテストの受賞作品の特徴

2021年度で8回目の開催であり、第1回～8回まで中学生・高校生合わせて、全国から1027作品の応募があり、115の作品が受賞した。第7回の最優秀賞は、実地調査に基づき、ゴミ箱の設置方法を数理的に最適化し、最低限必要なゴミ箱数と設置場所を求めた「渋谷駅周辺地域におけるゴミ箱設置の最適化」であった。これまでの受賞作品は実に多様性に富んでいる。受賞作品を、分野と方法、データソースの3つの観点でフラグ付けした

ところ、分野では社会系と自然科学系が多く46と38作品、情報系と人文・スポーツ系、ビジネス系が13、11、7作品であった。大変多くの分野をカバーしており応募者の多様な興味を反映している。新型コロナウイルス感染症、ゴミ問題などの流行のテーマや、野良猫との遭遇確率、室内干しの生乾き臭などの日常的テーマも多かった。方法では、モデル化と統計、その他が41、54、20作品であり、2つのテーマ設定を反映しバランスが取れていた。データソースでは、オープンデータと独自取得データ、その他が43、59、13作品であった。インターネット上にはデータが溢れておりオープンデータ利用に偏りがちだと思われるが、独自取得データによる作品が半分以上を占めるのは、応募者の努力の大きさを反映しているものと考えられる。

数理工学コンテストのポスター

数理工学コンテスト
HPはこちらから

2 今後の展望

高校の新学習指導要領の実施が2022年に始まる。新設の情報Ⅰが必履修となり、これまで大学科目であったアルゴリズムや、仮説検定、クロス集計、回帰分析などの統計学を含むものとなる。また「総合的な探究の時間」、すなわち「生徒が主体的に課題を設定し、情報の収集や整理、分析を進め、課題を解決する」授業が始まる。これは、高校での学習目標が、本コンテストの目標である「数学を使い社会課題の解決を目指す」ことと大きく重なってくることを意味する。これまでも、Pythonを用いたシミュレーションや重回帰分析、テキストマイニングなど大学レベルの手法を駆使した作品もあったが、SSH指定校の場合が多かった。しかし必履修となることで、高度な方法を多くの生徒が学ぶこととなり、「総合的な探究の時間」で、高度な方法を用いて課題解決を試みることとなる。従って、本学の数理工学コンテストは、高校での探究の成果を試す場として、今後より活用されていくものと期待される。これまで、分野、方法、データソースそれぞれで多様な作品を育んできた数理工学コンテストは、生徒の多様な発想と探究の成果を受け止めて、発展させるための良きツールとなるであろう。

［共立女子大学］

建築・デザインコンペ「わたしtoデザイン」の紹介

松本 年史　共立女子大学名誉教授

共立女子大学家政学部建築・デザイン学科で２０１７年から開催してきた「わたしtoデザイン」は、建築やデザインに興味を持ち、この分野を志そうとする中学校・高校・大学に通う女子生徒・学生を対象としたデザインコンペとして企画された。このコンペの開催によって、生徒・学生のデザインへの興味をいっそう喚起し、デザイン力をつけてもらうことを目的としている。また、このコンペを通して本学建築・デザイン学科に興味を持ってくれる生徒が増えてくれることも期待している。

「わたしtoデザイン」の言葉には、わたしを取り巻くデザイン、わたしの好きなデザイン、わたしが志すデザイン、わたしが目指すデザイン…などわたしとデザインとの様々な関係の意味が含まれている。現在開催されているデザインコンペは応募者を女性に限定したコンペが非常に少ないこともあって、当初「わたしtoデザイン」は応募条件を女性限定としていたが、２０２０年からはこの制限を撤廃し、より幅広い生徒・学生に参加してもらう企画とした。また、全応募作品に対して、教員のコメントを添付して返却し、これからの作品づくりの参考となるよう対応もしている。

第１回コンペのテーマは「雨宿り」とした。突然の雨で軒先を借りて雨宿りする風景を現代の便利な社会に生活する私たちは忘れてしまったように思うが、誰もが経験したことがある「雨宿り」から様々なデザインにつながる情景・発想が生まれることを期待した。

初回は学内から１０４作品、学外の高校生から26作品の応募があり、建築・デザイン学科の教員、助手全員で１次審査を行い23作品を選出。２次審査は10月に開催した共立祭の会場で実施し、選出者に各作品の説明を行ってもらい、当日優秀作品の表彰式を実施した。

第２回のコンペは２０１８年に開催し、テーマは学生からの提案で「よりみち」とした。また、この年からこの企画

への学生の積極参加を意図して、学科に所属する大学院生が中心となって企画と開催・運営を行うこととした。この年は学内80作品、学外37作品の応募があり、1次審査で25作品を選出し、10月の共立祭で2次審査と表彰式を開催した。

第3回のコンペは2019年に開催され、テーマは2回目と同じく学生からの提案で「音」とした。また、企画・運営は各研究室に所属するゼミ生を中心に実施。学内96作品、高校生17作品の応募があり、1次審査で25作品を選出し、10月の共立祭で2次審査と表彰を行った。

第4回のコンペは2020年に開催し、テーマは学生からの提案で「夏の、」に決定した。この年は学内113作品、高校生17作品の応募があったが、新型コロナウイルスの流行のため、1次審査で選出した25作品の2次審査はオンラインでの開催となった。

2021年開催の第5回のコンペのテーマは「空」とした。新型コロナウイルスの流行の中で学内から120作品、学外から46作品の応募があり、1次審査で25作品を選出し、オンラインで2次審査を開催した。

「わたしtoデザイン」は2022年で6年目を迎えるが、今後外部の中学生や高校生、大学生の応募を増やしていくべきだと考えている。そのためには、これまでの開催方法や広報活動方法を再検証し、より有効な企画にしていく必要があるのではないだろうか。

コンペ最終審査でのプレゼンテーションの様子